

未来の踊りのためのプログラム

Dance Reframing for the Future

事業レポート

「芸劇 dance ワークショップ 2022 未来の踊りのためのプログラム」では、「Reframing for the Future」をコンセプトに、従来のダンスの枠組みを更新するようなクリエイションをサポートすること目的とした事業です。

今回のプログラムでは、「ラボラトリー」と「ワークショップ」のふたつのカリキュラムで展開しました。「ラボラトリー」では、パフォーマンス集団「contact Gonzo」の塚原悠也さんをメンターに迎え、参加者自身が持ち込む創作のアイデアを実践的に練り上げ、メンターと共にアーティストの実験的な取り組みを支援。一方の「ワークショップ」では、多様な表現分野の講師陣と共に、クリエイションにおける新たな視点と方法論を探りました。

募集概要

募集期間：2022年7月26日（火）～8月26日（金）

募集人数：6組（個人、または10名以下のグループ）

対象：芸術表現ジャンルを問わず、芸術文化に関わる公開活動（会場規模、有料無料は問いません）の実績が3回以上ある振付家、ダンサー、パフォーマー、演出家、俳優、美術家、音楽家、映像作家、ドラマトゥルクなど。

参加料：5,000円

実施概要

期間：2023年1月25日（水）～3月4日（土）

会場：東京芸術劇場 リハーサルルーム

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場／東京都

企画協力：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

運営：未来の踊りのためのプログラム事務局（特定非営利活動法人アルファルファ）



参加者が取り組んだプログラム・スケジュール

2023年

- | | |
|-------------------|---|
| 1月25日（水） | 初回プレゼンテーション |
| 1月26日（木）～1月28日（土） | ラボラトリー：第1ターム |
| 2月1日（水） | 余越保子 ワークショップ「『京鹿の子娘道成寺を踊ってみる』ペダゴジ〜芸の「道」「型」について」 |
| 2月6日（月） | 梅田哲也 ワークショップ「立っています」 |
| 2月7日（火）～2月10日（金） | ラボラトリー：第2ターム |
| 2月15日（水） | 岡田利規 ワークショップ「イメージーションについてきわめて具体的に扱うワークショップ」 |
| 2月18日（土） | 川口隆夫 ワークショップ「憑依する身体 — 大野一雄の踊りによって」 |
| 2月28日（火）～3月2日（木） | ラボラトリー：第3ターム |
| 3月4日（土） | 参加者によるショーイング |

MOP ラボラトリー（全13日）

作品を生み出すプロセスの質を高め、より実験的に創作に挑むための実践型プログラムです。参加者自身が持ち込んだ創作のアイデアをベースに、メンターによるファシリテーションが行われます。そして構想から発表までの過程で、参加者同士のディスカッション、試行錯誤を重ねて作品を練り上げていきます。クリエイションを軸にした対話を通じ、客観性と批評性を養いながら、参加者がアーティストとしての視座を形成することを目指しました。



MOP ワークショップ（全4日）

芸術諸分野から講師を招き、舞踊芸術に新しい視点をもたらすべくジャンルを横断したワークショップを行います。舞踊芸術の可能性を多角的に探ると共に、ラボラトリーにおけるクリエイションのプロセスに閃きや刺激を与えることを目的として実施しました。



メンター／参加者／ワークショップ講師

メンター ————— 塚原悠也（アーティスト／contact Gonzo メンバー）

プログラム参加者 ————— 佐藤茉優／櫻井香純／Ne Na lab（遠藤七海・杉本音音）
瀧澤綾音／武安由宇里／仁田晶凱

ワークショップ講師 ————— 余越保子／梅田哲也／岡田利規／川口隆夫

メンター



©Rieko Shiga

塚原悠也 アーティスト／contact Gonzo メンバー

関西学院大学文学部美学専攻修士課程修了後、NPO 法人ダンスボックスのボランティア、運営スタッフを経て、アーティストとして 2006 年パフォーマンス集団「contact Gonzo」の活動を開始、パフォーマンスやインスタレーションなどを国内外、屋内外問わず発表。個人として 2020 年演劇作品『ブラータナー：愚依のポートレート』におけるセノグラフィと振付に対し「読売演劇大賞」スタッフ賞受賞。contact Gonzo として 2020 年度「京都市芸術新人賞」、「タカシマヤ美術賞」などを受賞。現 KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター。



©Naoshi Hatori

参加者



佐藤茉優 さとう・まゆ

2000年生まれ。神奈川県出身。5歳からストリートダンスをはじめ。16歳の時に高校の創作舞踊部でコンテンポラリーダンスと出会い、そこでダンスを<創る>事を初めて知る。挫折と面白さを6:4くらいの割合で経験。日本大学芸術学部演劇学科洋舞コース在学中。現在は様々なコンクールやイベント・舞台に参加。作品創作も行い学内外で活動。今年卒業を控え、社会でもっと多くの芸術表現を知りたいと考える。

『身に纏める』 振付・出演：佐藤茉優

洋服を当たり前のように着て、私たちは今日も過ごしています。ファッションって凄くて、近年は定義がありすぎてもはやよくわからない。人間の身体や思考をなぞるように変わっていくファッションですが、風変わりな洋服でも、誰かが「これは新しいファッションだ」と言えば「ああ、なるほどな…」と忘れてしまいます。シャツの袖に腕を通して、ズボンを履き、上着を羽織る。そんな疑問にも思わないような行為を、当たり前のように全人類が毎日行っています。ズボンの裾に腕を通して、シャツを履き、上着を被る。こんなことも、いつか当たり前のように起こり得るのだろうか。私はこれをしてみた時に、なんだか<いつもと違う>にワクワクしました。ちなみに新しいファッションが生まれる傍らで、流行は20年で1周するらしいです。これからもこの先も、まわり続ける流行、新たなファッション、当たり前になりに続ける洋服の存在に、私は否定も肯定もしません。ただ、当たり前から時々生まれる<いつもと違ういつも>に少し、高揚するのです。

参加にあたっての目標設定

「ダンスの作品を創る」と考え過ぎずに創作することが大きな目標です。また、正解に縛られず、自由に解釈ができる作品を目指したいです。振付にも演出にも幅を利かせ、常に客観的な視点を持ちながら創作をしたいと思います。

プログラムの成果と今後の展望

参加者同士・塚原さんとの意見の交換、また各WSでの経験も経て、自分の考えを言葉にすることや作品のブラッシュアップをより高いモチベーションで行うことができた。

実際に同じ空間で考えを共有することはとても貴重な時間であり、閃きと学びをリアルタイムに実感できたことは、大きな経験になった。

一つのテーマに固執して考え続けるのではなく、さまざまな方向からの知識や経験を得られる時間が適宜あったことも、創作における大きな発展につながったと思う。どのようにして創作するのか、どこにアプローチをしていくのかなど、情報の共有の時間も非常に有効的だったように感じる。

また、自分自身が今後どのような作品を創作し、どのようなフィールドを目指していくのかということの情報をたくさん得ることができたことは、今後の活動に非常に影響してくるだろうと思う。とにかく多くの作品やジャンルに触れ、そのアウトプットを表現として発信していく手段をこれからも考えたい。



©Naoshi Hatori



©Naoshi Hatori

参加者



櫻井香純 さくらい・かすみ

ダンサー・コレオグラファー。幼少期より育かほるにクラシックバレエ、モダンバレエ、ジャズダンスを学ぶ。桜美林大学芸術文化学群卒業。在学中よりコンテンポラリーダンスを木佐貫邦子に師事。在学中の2年間は辻本知彦のもとで振付アシスタントとして活動。現在はダンサー・振付家として作品発表を行いながら、コレオグラファーとして広告や映像媒体を中心に活動している。

『悪夢を呼び起こす』 振付・出演：櫻井香純

精神的にストレスを感じる悪夢を頻繁に見る自分が、その夢の中で感じたことや見たものをできるだけリアルに作品に落とし込みたい、というところから創作が始まりました。まず夢とは、視覚情報が遮断された状態での脳の覚醒に近いもので、過去の記憶や、映像などで見た光景などがもととなっています。寝ている時、先に書いたように視覚は遮断されますが、聴覚は機能したままとなっていて、夢に影響を与えることも多くあります。そこで音を、観客とパフォーマーを繋ぐ「実感スイッチ」として置いてみることにしました。観客に目を瞑って横になっもらい、自分はスピーカーを持って移動。音を鳴らす位置やタイミングと動きを振り付ける作品になっています。わたしは自分の悪夢を思い出し、何が起きたか、何を見ていたのか分析し、できるだけ正しく動きに落とし込みます。

目を瞑り音だけ聞いてもらい、その周りを自分が夢から着想を得た振付で動き回することで、観客にどんなことを想像してもらえるのか。それは観客それぞれの悪夢にも近づくことができるのかという実験です。

参加にあたっての目標設定

身体による言葉の具現化、重力感に焦点を置いて作品をつくり、自分なりの理解を深めていきたいと思っています。自分が作る動作の流れについても把握し、適切な選択とコントロールができるようになりたいです。重力感については、作品内にデュオシーンを入れることによって考えを深めてみたいと思っていますので、後半人呼んでトライ出来たらと思っています。

プログラムの成果と今後の展望

制作を始める前は、とにかく“実験的な振付を作ること”について拘りを持っていました。MOPの期間を使って、憧れ・理想のダンスを頭の中により濃く描き、無限に広がる動きの可能性を掴むという目標がありました。

“実験的な”の意図として、見た目では惹きつけられる作品・ダンスを外側からの視点で詳細に作りたいと思っていたということです。

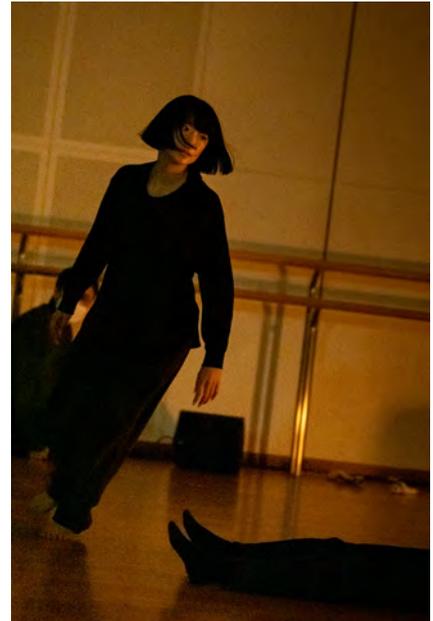
作った振付を自分で踊る時にぶつかる巨大な違和感と上手く付き合うための一案でしたが、制作を進めるにつれやはりどうしても嘘をついているような気持ちになり、最終的に作品を仕上げるために異なる方法を取るようになりました。

WSやタームごとのディスカッションによって、自分は今までどうやって振付を生んでいたのか、言語化できていなかったポイントが徐々に明確になりました。

イメージから動きを生み出す方が向いていること。どうしてその動きをしているのか、理由の詰まった動作・ダンスに魅了を感じるなど。

「自分は何が好きなのか、何を素敵だと思うのかを明確にすることが如何に大切なことか知る」事が出来たのが、今回参加して得たシンプルかつ大きな成果だったと思います。

発表を終え、1番多かった感想は“見せ方”についてでした。ただ、初めに想像していたような見目に偏った作品とは違い、中身から現れた見目についての感想は実感が持て、より良く更新していけるものだと思えて知ることができました。これからも信念を積み重ね、作品制作を行っていきたいと考え直す素晴らしい機会となりました。





©Naoshi Hatori

参加者



Ne Na lab ねならぼ

杉本音音、遠藤七海による企画。新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言下の2020年4月より活動開始。リサーチをベースに身体を用いた実験・考察をし、それを基にパフォーマンスやSNSでの公開を試みる。

<https://ne-na-lab.jimdofree.com>

『SQUARE (芸劇前)』 構成・出演：Ne Na lab (杉本音音・遠藤七海)

リサーチ：佐藤茉優、櫻井香純、瀧澤綾音、武安由宇里、仁田晶凱

「人は都市に振り付けられている」

都市に生きる人々は建築物・他者といった障害物やルールに対応することによって秩序を保っている。すなわち人々の行動は、都市そのものに振り付けられていると言えるのではないか。そう思って街を眺めると、実は街中の全ての人が都市による振付を踊っていて、無関係に見える他者でさえ、振付の中で必然的な関係性を形成しているのかもしれない。しかし、そうして傍観している自分もまた、都市に振り付けられた一部なのかもしれない。芸劇前に立つ看板周辺のエリアを通行する100人の行動を12のパターンに振り分け、抽出された438の行動を音源化した。舞台上のダンサーはそれぞれのイヤホンからシャッフルで流れてくる振付に従う。動きは個人とイヤホン(音源)との関係の中で成立しているが、それ以上の「何か」が生まれたとき、私はそれを「ダンス」と呼びたい。

参加にあたっての目標設定

- ・目に見える記号的な身体と言葉では説明できない質感の分離、ギャップを生み出す。(他者をトレースすることで、動きそのものの単純さに反して生まれる違和感が質として現れる。)
- ・恣意的にならない振付、タスク、ルールの作成と実行(それは本当に表現・ダンスになるのか…?) cf Yvonne Rainer

プログラムの成果と今後の展望

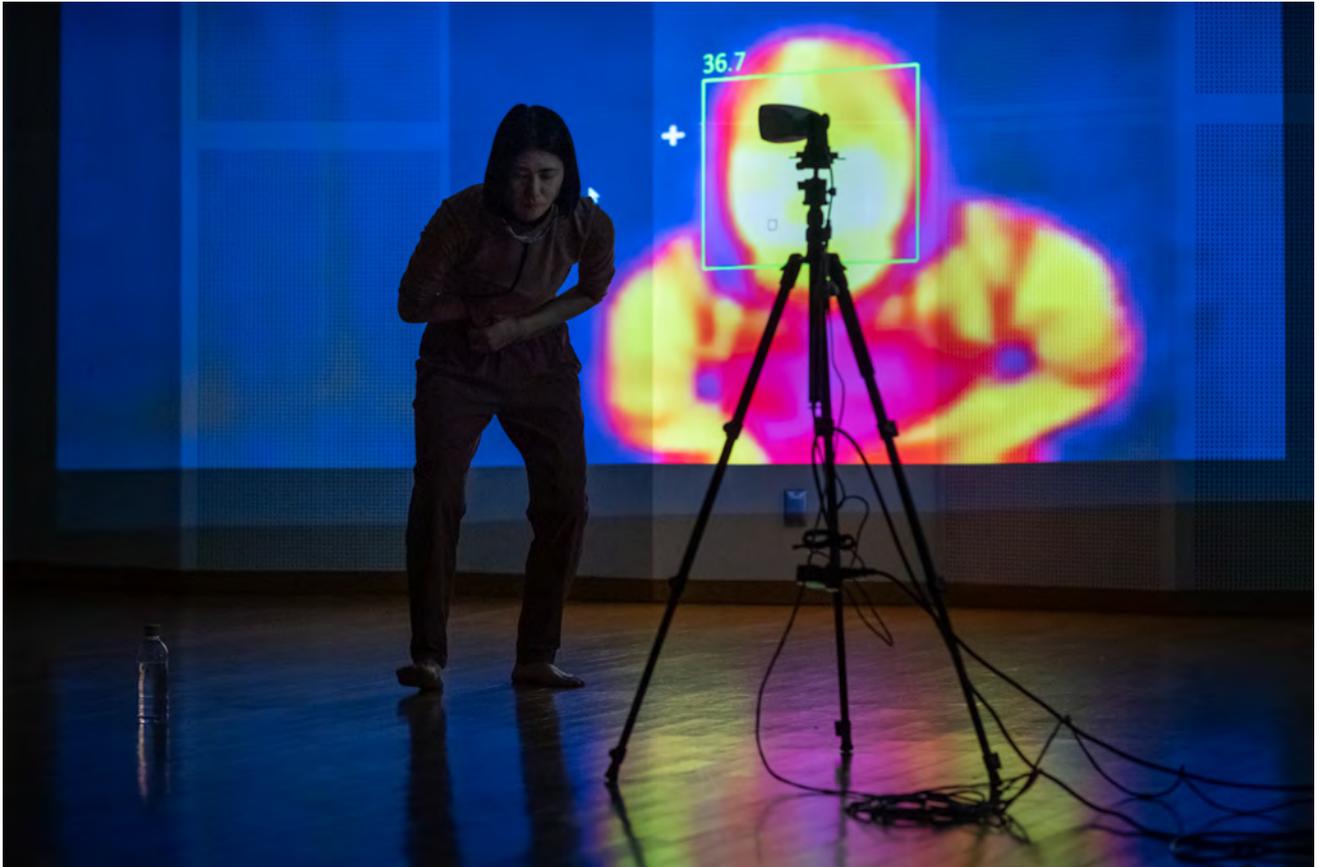
遠藤が大学時代から持っていたアイデアに対して Ne Na lab で取り組むことで、これまで作品化に対して抱えていた課題感が少し前進したように思います。それは当初思い描いていたものとは少し異なる形にはなっていますが、これがユニットで創作をすることなんだ、という強みの認識や、ある種の諦め(妥協しなければならないこともあるという意味で。必ずしもネガティブな意味ではないです。)がつかまりました。このように、発表まで終えることができたのは塚原さんにメンター立ち合いで相談に乗ってもらえたことが大きかったです。アイデアのフィードバックをもらうべきところで、その話が全然できなかったのは反省だったのですが、作品にしなくてもいいという環境だったからこそ、回り道をして相談できた時間が今後にも生きてくると感じています。

具体的な今後の展開としては、このアイデアを作品として形にしていけるよう、発表の機会を探っていきます。

また、塚原さんからアドバイスいただいた通り、今後の創作において、参考にしている人や観て欲しい人に対しては積極的にコンタクトを取ってみたり、業界外でアーティストとしての職能を活かす機会を考えたり、ダンスをやりながら生き残っていくためのしなやかさを備えていきたいです。



©Naoshi Hatori



©Naoshi Hatori

参加者



瀧澤綾音 たきざわ・あやね

新潟出身。6歳から新潟で演劇に関わり、りゅーとぴあ APRICOT 参加。上京後、文学座・美学校・無隣館・映画美学校で演劇を学び、インド政府認定ヨガ講座修了。演者として演劇・パフォーマンス・映像・写真・インスタレーション・旅など、多様で重なり合う作品に参加を続け、2022年「調布市せんがわ劇場演劇コンクール」<俳優賞>受賞。心と身体のことを考え、ただあることの美しさ・生きている美しさに光をあてるため活動している。

『あるがままを愛するために』

「あるがままを愛するために」 takizawaayane.com/project

ひとつの人間を様々な方のまなざしからうつしていく能動的に愛するため始めた試みです。

「あるがまま」とは何か考え続けています。

創作中は自身の思考と向き合い続けた日々になりました。作品づくりは自分を大切にしていないとできないと知り、自身をそのままに受け入れ愛しんでいきたいと思えた大切な日々となりました。

ヨガ哲学では、人体を魂 / 思考 / 感情 / 内臓 / 呼吸 / 肉体 / 感覚器官にわけているそうです。魂は、不変な あるがままのもので歓喜の中にある。そして魂

は大きなひとつの湖のように繋がっていて、自分という個体はそこからのひと掬い。だから私はあなたであり、あなたは私である。じゃあ、本来、世界は愛と喜びで満ちている？

そんなことを考えながら。この機会に出会えたあなたと この瞬間を ご一緒できるのを楽しみにしています。

参加にあたっての目標設定

<作品の目標>

- ・五感、身体、感情、思考を感じ、研ぎ澄まされる作品
- ・命や生きていることを感じられる作品
- ・体感的作品（インスタレーションのようにそれだけになるような感覚）

<見え方の目標>

- ・みてる方が自由に受け取れるような余白をつくる
- ・みてる方が主体的に能動的にいれるような、参加できるようなしくみをつくる
- ・フラットに馴染みやすい導入/没入する瞬間をつくり、緩急をつける

<個人的な目標>

- ・軽やかに楽しく創作する
こうすべきをうたがひ、わくわくする方を選ぶ。ひとりでかかえこまない、相談したり紙に書いたり具体的に考える。
- ・たくさん挑戦する
「失敗」をおもしろがる

<先への目標>

- ・いろいろな場所で できるだけ1人の力で、上演できるようなレパートリー作品をつくる
- ・見ている方とのコミュニケーションの作用があるような作品、仕組みづくりを考える



©Naoshi Hatori

プログラムの成果と今後の展望

このプログラムに参加して、大切なことやたくさんの種を得ることができ、作品創作と作家としてのスタートラインに立てたなと思います。また人間としての成長につながりました。

<作品創作についての気づき>

人体に興味があり、身軽にひとりで作品創作と発表ができたらいなと思ひ、このプログラムに参加しました。とても時間がかかり遠回りしましたが、自身の興味が明確になり、これはしたくないということがわかり、これからどんな実験をしていきたいのか/どんな実

験をしていきたいか、腑に落とすことができました。表現方法も「具体的な肉体の実験をしていく」という一つの方法を得て、作品創作と発表していく手がかりをつかめ、スタートラインに立てようと思います。

私は頭で辻褃を合わせようとしたり、説明できることから作品のことを考えていました。しかしそうしていると、楽しくなくなってきました。最終的にシンプルに自分のおもしろいとか、楽しいと思う景色を、共有することができたらいいなと気づきました。そうしていれば、全ての人におもしろがってもらえる作品でなくてもいいなと思えるし、もしかしたら楽しんでくれる人もいるかもしれない。そして見ていてスッキリと気持ちのいい作品になのかとも思いました。

他の参加者のみなさんの、作品の大まかな形を決め、発表/フィードバックを経てブラッシュアップしていくさまを見ていて、こうやって作品は作られていくのだなと知りました。自分は決めるのが遅く showing の日にスタートラインに立ち、やっと自身でのこのように改善した方がよいという俯瞰した意見が持てるようになったことから、やることを決めてしまうことが大切なのだとも思いました。たくさんの失敗をさせてもらえる場を持たせたこと、そしてそれに協力してくださる方々がいたこと、だからしっかりと失敗を腑に落ちた学びや表現方法を得ることにつながられました。この場に参加できたことに感謝しています。

<今後の活動において、今回の経験をどのように活かし展開するか>
ラボで見つけた自身の興味と発表の方法を元に、今年度中にこれから自身でつくった作品を発表したいと思っています。

まずは一人で人体の実験を続けたり、いろんなアーティストの作品にふれていくことでさらに新たな可能性を見つけていき、人にみてもらい感想をもらう会（ワークインプログレス）も催していきたいと思っています。これは今回のラボに参加していく中で、やったことへの言語でのフィードバックが作品を発展させていくときに必要だと思ったからです。そして今年度中に発表をして、来年度以降には自身の創作で培った自身の肉体の実験のレポーターも元になら、いろんなアーティストとのセッションもしていきたいです。

ラボやワークショップで、国内外で作品を発表している方々にふれたことで、海外でも活動していきたいと思いました。

まずは英語を勉強しつつ、海外へ旅立ち、国内外での滞在制作をその土地や人と知り合っていくながら、新たなものを生み出していきたいです。そして、そのうち出身地の新潟や日本全国へもおもしろい作品を共有したり、アーティストの招致ができたらいいなと思います。またアーティストとしていく上で、お金のことも考えるきっかけになりました。

助成金だけではなく、いろんな事業や会社にも目を向けながら、視野を広くいろんなことへの挑戦をしていきたいと思っています。この企画に参加して、私は一人で作品をつくるより人とつくったりすることが好きだと改めて気づきました。その際にできるだけ一緒する方や自身に対して、ゆとりのある創作するためのお金も巡らせながら、周りも自分も楽しめる道を探していきたいと思っています。そのためにも自分の苦手なこと得意なことを俯瞰しながら、協力してくれる仲間も増やしていきたいです。

創作をしていくためにも健康的な心身が非常に大切だと今回思いました。

そして、自分を大切にしていないと作品づくりは難しいと思い知りました。自身を大切にすることで相手も大切に、楽しくコミュニケーションをして楽しく生きていけるのかなと思いました。心地よさや楽しさに目を向けて、どんな状況も楽しめる俯瞰の目、そして自分は運がよいと思い感謝を持ちながら視野をひろく生きていけたらいいなと思いました。

これからの人生のためにも、作家としても、学びの多い時間でした。ありがとうございました。



©Naoshi Hatori



©Naoshi Hatori

参加者



武安由宇里 たけやす・ゆうり

東京芸術大学大学院修士課程（先端芸術表現専攻）修了。在学中、国際交流基金「KAKEHASHI PROJECT」に参加。「バレエコンクール in 横浜」コンテンポラリー部門 シニア 1位受賞。「リズムダンスコンテスト」第3位受賞。「六本木アートナイト 2022」にて映像作品「しなやかに生きる～曲がる人々～」出演(contortion studio NUGARA)。新国立劇場オペラ『ボリスゴドゥスフ』出演。現在、工学院大学非常勤講師。コンソーションの身体と踊りのあり方を模索中。

『あいだ』 振付・出演：武安由宇里

これから人とアンドロイドが共存していくような未来を想像した時、その二つの存在によって踊りや動きはどのように進化していくのか。人とアンドロイドの身体構造や動きが、交じり合った先の動きは「踊り」になっていくのか。一つの動作（本作では「拭く」という動作を主にしています。物を拭く、自分を拭く、物と自分を拭く、など）を続けることで、物と人のあいだに生まれ得る身体の形や動きや、物に身体や動作が馴染んでいく様から動きを発展させることを試んでいます。

参加にあたっての目標設定

コントーションには既存のポーズや技があり、主にそれらを見せていくことが主です。この見せ方はどのような題材によって変化するか探したいと思っています。

プログラムの成果と今後の展望

現状や物とつながりを持てる作品を創出していきたいという思いと、現在取り組んでいるコントーションの表現について可能性を探りたいと思い、参加を臨んでおりました。

ワークショップを経て、これまでは舞台上に作品を創出するという考えが、現状と自分を切り離さずに自他の存在を受け入れてパフォーマンスをすることを学び、今後の考え方に変化が起きそうだと感じております。パフォーマンスの仕方や作品の創り方など、工夫の可能性があると思うようになりました。野外や屋内の空間、人の身体、他ジャンルのアート作品と相乗効果をうみ出す方向に、身体を使って創作を続けていきたいと思っています。



©Naoshi Hatori



©Naoshi Hatori

参加者



仁田晶凱 にた・あきよし

2013年からベルギー・ブリュッセルにあるP.A.R.T.S.で振付とダンスを学ぶ。在学中にヨーロッパ各地の舞台芸術祭に参加し、多くの振付家の作品に出演。卒業後は帰国し、これまでに自身振付作品を劇場のみならず、美術館、ギャラリー、アートセンター等で上演。クラシック、現代音楽、ジャズなどを使用したダンス作品を創作しており、音楽と身体の関係性に特化した振付を探求している。ダンサーとして2019年よりCo.山田うんに所属。

『Processing in tune (仮)』 振付・出演：仁田晶凱

本創作はコミュニケーションツールとしての身体の動きにフォーカスを当て、ジェスチャー、手話、表情、反射といったアウトプットがいかに効果的で有用な手段になりうるのかの可能性を検証し、さらに、社会的な機能から切り離された身体の身振りにパフォーマンスティヴィティを見出す、というリサーチプロジェクトです。

参加にあたっての目標設定

動きの一つ一つが、ダンスとして抽象的に昇華されるのではなく、コミュニケーションとしての身体の動きとなったものを作品中で用いたい。

その動きが観客にコミュニケーションとして受け取ってもらえるための演出を考える。

プログラムの成果と今後の展望

・表現手段の再検討

これまで行ってきた創作では、身体と音楽の関係性という興味を中心に身体のムーブメントを作り出すという、舞踊的なアプローチでテーマに取り組んできた。既存の体系化されたテクニックから抜けた身体のムーブメントを生み出す重要性を再確認し、それが舞踊の更新につながることを改めて感じた。

・優先順位の付け方

創作において、ヒト、モノ、カネの選び方や回し方について、塚原さんの具体的な経験や考えを聞いた。「この作品に必要な人は誰か」という問いや、カネや規模に関わらず何かを作り出すことを楽しみに変換する考え方など、自分がいかにある特定のデザインされた状況で創作を行っていたかを実感し、クリエイションでの行き詰まりに対して「ぜんぜんいっぱい方法がある」ということに気付かされた。

・今後のリサーチ・クリエイション

美術家の関川航平さんに声をかけて、今回リサーチした内容を共同で膨らませていくことになった。同時にアーツカウンシルの創造発信助成、神奈川県のマグカル推進事業、Daby によるレジデンスと3つの公募にこのプロジェクトを応募した。



©Naoshi Hatori

第1回 余越保子「『京鹿の子娘道成寺を踊ってみる』ペダゴジィ〜芸の「道」「型」について」

2023年2月1日（水）

会場：東京芸術劇場リハーサルルーム

【講師コメント】

日本舞踊の名作「京鹿の子娘道成寺」を、現代人の身体で咀嚼、理解する回路を見出していく集中ワークショップを行います。ダンス経験の有無を問いません。ペダゴジィ=学びの行為の中に存在する師弟関係を仮想しつつ、師匠以外の他者（死者、芸能の神様、未来の踊り手）を想像しながら、古典舞踊の型の在り処を解体、分析し、参加者全員で共有と考察を行います。



©Miana JUN

余越保子（演出家・振付家・舞踊家）

NY 在住中（1987年～2014年）に、ベッシー賞（最優秀作品賞）を2度受賞。グッゲンハイムフェロー、ファンデーションフォーコンテンポラリーアートアワードなど、米国内での受賞多数。2015年にNYで発表された「ZERO ONE」はニューヨークタイムズ紙のダンス批評家を選ぶ年間ベストテンに掲げられた。能「山姥」をベースにした日米共同制作作品「YAMAMBA AS A BEAR」（邦題：山姥は熊を夢見る）が、「ヨコハマダンスコレクション 2021-DEC」の招聘作品として上演。第20回AAF戯曲賞受賞記念公演『リンチ(戯曲)』（戯曲：羽鳥ヨダ嘉郎）の演出・振付を担当し2022年11月に上演予定。京都を拠点とし、DOJOJI活動体メンバーとして関西のダンサー、演出家、映像作家とコレクティブな芸術活動を展開している。

実施レポート

2023年2月1日（水）、余越保子さんを講師にお招きし、「未来の踊りのためのプログラム」第1回ワークショップを実施しました。余越さんは、ニューヨークで35年、現在は京都を拠点に活動するアーティストで、主にダンス・パフォーマンス、映像作品を手掛けています。

この日は、日本舞踊の名作「京鹿の子娘道成寺」を、現代人の身体で咀嚼、理解する回路を見出していく集中ワークショップを実施しました。

まず参加者は余越さんのこれまでの公演映像などを見ながら、活動経歴のお話を聞くことからスタート。次に、参加者全員で「京鹿の子娘道成寺」を練習し、最後に一人ずつ発表しました。



日本舞踊との出会いと余越さんの解釈

余越さんは、コンテンポラリーアーティストでありながら、日本舞踊の研鑽を積み、自身の作品作りの中で、古典作品を現代舞踊へと変換する試みを多数行ってきました。参加者は、余越さんが日本舞踊の稽古を受けている映像を見ながら、海外を拠点に活動されていた彼女がなぜ日本舞踊に関心を持ったのか、余越さんから見た日本舞踊の印象などの話を聞きました。

「京鹿の子娘道成寺」の指導

まず余越さんが一連の動きを通して見せたあと、参加者は2グループに分かれて、グループごとに扇の扱い方、歩き方、立ち方などの指導を受けました。参加者はこの日は全員浴衣を着用したのですが、座るときの所作や袖や裾の扱い方に、少し苦戦しているようでした。自由練習の時間では、参加者同士でわからないところを教え合う姿も見られました。

発表

最後はひとりずつ、音源に合わせて舞踊を披露しました。短い練習時間の中ではほぼ完璧に仕上げる人もいれば、覚えられなかった部分は自身の創作を交えた別の型を用いた動きをする人もいました。余越さんはそれぞれの舞踊を見て「おもしろい」と笑顔になり、「型のある日本舞踊には強さがあり、シンプルな動きの中では演者のありようがよく見えます。」と参加者にフィードバックをしました。

文・写真：ゆりえる



第2回 梅田哲也「立っています」

2023年2月6日（月）

〔講師コメント〕

「岬の先端の先端は、最後まで本当に尖っていたのです。穏やかに波が寄せるトンガリに足を置いて立ってみると、目線が身体から飛び出して、上空から小さな自分を俯瞰しているような感覚を味わいました。地図で見たことがあるあの尖った岬の先端に、その瞬間、立っていました」



©島崎ろでいー

梅田哲也（アーティスト）

おもにインスタレーションとパフォーマンスを制作します。作品はよく建築や音楽のようにもとらえられます。なにを作るかは手をつけてみないとわかりません。近年の個展に「梅田哲也 イン 別府『O滞』」（別府、2020～2021年）、『うたの起源』（福岡市美術館、福岡、2019～2020年）。パフォーマンス作品では『Composite:Variations』（Kunstenfestivaldesarts 2017、ブリュッセル）、『INTERNSHIP』（国立アジア文化殿堂、光州、2016年 / TPAM 2018、KAAT 神奈川芸術劇場ホール）などがあります。

実施レポート

2023年2月6日（月）、梅田哲也さんを講師にお招きし、「未来の踊りのためのプログラム」第2回ワークショップを実施しました。梅田さんは、主にインスタレーションやパフォーマンスなどの作品を発表する、大阪拠点のアーティストです。

この日、参加者には集合場所（和泉橋防災船着場）と時間、船に乗るということだけが伝えられていました。一人ずつ時間が指定され、参加者たちはその時間になると船着場までやってきます。到着するとすぐライフジャケットを身につけ、梅田さんとアシスタントの加藤さんが操縦するボートに乗り込みました。

目的地は「暗渠（あんきょ）」。暗渠とは、地下に埋没したり、蓋をかけた水溝や水路のことで、地上からは見えなくなった場所です。今回は秋葉原駅近くの船着場を出発し、神田川を御茶ノ水方面に進んだところにある入口から暗渠に入り、そのまま地下を進み、出口からまた戻ってくるという約30分のコースを体験しました。





暗渠の中は天井の低いトンネルのようで、光が届かない闇の空間でした。梅田さんがライトで水面を照らし、その反射がトンネル内に揺らめきながら映っていました。途中、ボートのエンジンを切って静寂の中で揺れを感じたり、汽笛を鳴らして暗渠内に響き渡るのを聴いたりする時間を過ごしました。

全員が体験した後は、場所を移して振り返りの時間。それぞれ感じたことをシェアしました。そこで出たコメントからいくつか紹介します。

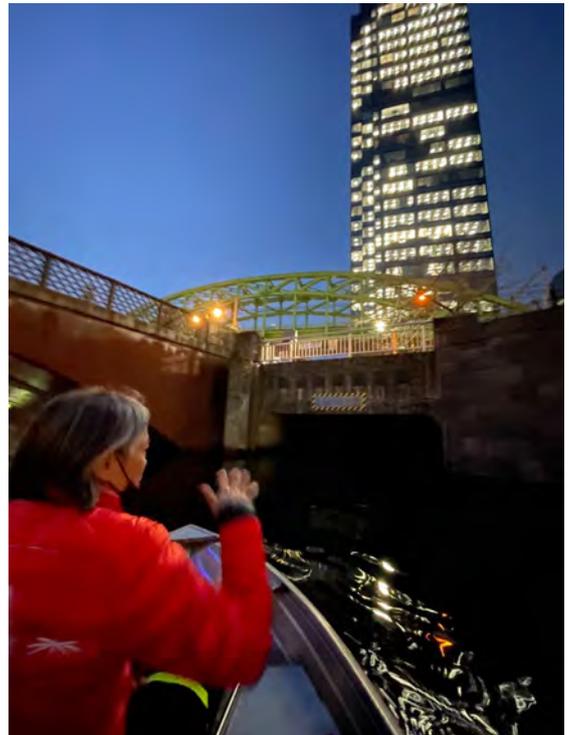
「東京の街を別の角度から見ている感じがした。今まで気づかなかった、普段足を踏み入れられない”街の内側”みたいなものがあるんだって感じた。童心に帰るような気持ちになれた」

「過去と未来が逆転するような、時間が迫ってくるような感覚があった。自分がその中に溶けていくような、自分がなくなるような。私が踊るとかって、どうでもいいと思うような感じがした」

「光を消した時に丸く包まれている感じがして、羊水の中にいるような気持ちになった。頭じゃなくて体感としてぐっとくるものがあった。それが、表現というかパフォーマンスというか、体験できるもので。地形自体がそれに接続しているということにハッとした」

「2次元なのか3次元なのか、わからなくなる感じがした。ボートの揺れ、暗渠の匂い、ブザーの音に対してどンドン感覚的になっていて、思考がなくなって。自分がどこにいるんだろう、という感じが心地よかった」

参加者の経験した強烈な体験について、梅田さんは「コントラストの強い経験というのは、身の回りにあるものが突然異質なものに変わることで起こる」とコメントしました。水はとても身近にあるけれど、こわい存在でもあり、同時に落ち着くような感覚も梅田さんにはあるそうです。



また、梅田さんはボートで暗渠に行くという行為を、その日何度も繰り返しましたが、乗っている人やその時の状況に合わせて、船上での会話や暗渠でやることの内容を少しずつ変えていたこと、そしてそれが”振付”に似ているというお話がありました。自身のライブでの演奏を例に、「どれだけ力強くやっても響かなければ聞こえない。届けるために大事なのはエフェクト。導線をどうしていくか」だと伝えました。

今回のワークショップのタイトルは、「立っています」。それは、梅田さんが経験した特別な体験に由来するものでした。以前、友人と北海道の襟裳岬を訪れ、岬の先端に立った際、地図で見ていた先端に実際「立っている」という感覚、頭で知っていることとフィジカルが一致して、実感スイッチが入るような感覚があったそうです。

「未来の踊りを考えたときに、体験したことをただ伝えるのじゃなくて、体感してもらえるものを作りたい」と述べた受講生もいました。ワークショップと並行して行われるラボラトリーでは、参加者が実際に作品をクリエーションし、発表を行います。今回のワークショップでの経験が、作品にどのように結びついていくのでしょうか。

文・写真：岩中可南子



第3回 岡田利規「イメージネーションについてきわめて具体的に扱うワークショップ」

2023年2月15日（水）

〔講師コメント〕

あなたの今住んでいる、もしくはかつて住んでいた、家の間取りについて舞台の上でソロで話してもらい、ということをやるところからは始めるワークショップをやります。それを通して、イメージネーションがあなたの身体の状態に影響を与えたり、動きを与えたり、その動きの質に関与したりする——つまりイメージネーションがあなたを振り付ける——ということ、目の当たりにしてみる機会をつくりたいと思っています。イメージネーション、というともするとふんわりレベルで用いられてしまいがちなものを、ゴリゴリに、あくまでも具体的に扱う、わたしのそのやり方を紹介したいです。あとはそこからみなさんが自由に勝手に応用発展してくれることを願っています。



©宇壽山貴久子

岡田利規（演劇作家・小説家・チェルフィッチュ主宰）

“想像”を用いた独特な言葉と身体の関係性による方法論や、現代社会への批評的な眼差しが評価され、国内外で高い注目を集める。2005年『三月の5日間』で第49回岸田國土戯曲賞を受賞。主宰する演劇カンパニー・チェルフィッチュでは2007年に同作で海外進出を果たして以降、世界90都市以上で上演。近年では欧州の公立劇場のレパートリー作品も手がける。

2005年7月『クーラー』で「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2005一次代を担う振付家の発掘—」最終選考会に出場。森山未來、酒井はな、湯浅永麻などダンサーとのコラボレーションも多数。また、2022年には小説「ブロッコリー・レポリューション」で、第35回三島由紀夫賞を受賞。

実施レポート

2023年2月15日（水）、岡田利規さんを講師にお招きし、「未来の踊りのためのプログラム」第3回ワークショップを実施しました。岡田さんは、独特の言語感覚と身体感覚を通じた表現で、現代を代表する演劇カンパニーとして国内外で高い注目を集める演劇カンパニー・チェルフィッチュを主宰し、演劇作家、小説家として活動されています。

この日のワークショップでは、前半は「今住んでいる、もしくはかつて住んでいた、家の間取り」について、言葉や身振りをを用いて3分程度で他者に説明し、後半では「他の人が話した家」を自分の家としてのよう話すことに取り組みました。一人が終わる度に「やってみてどうだったか」、「見ていてどうだったか」を全員で話しあい、参加者も積極的に意見を交わしました。



想像すること

ワークショップの中で岡田さんは度々「想像することが大事」と言っていました。「語る家」について思い出し、想像することによって、言葉や動きが出てくるのだそうです。後半のワークでは「他人の家」の想像が曖昧なことによって、身体の動きや声が小さくなる参加者が見られ、空間の想像は身体に振り付けを与えてくれやすいことを全体で共有しました。「説明不足だったかもしれないし、説明しすぎたかもしれない」と振り返った参加者に対して「演劇は用意されているセリフを話す、それをやっても“話しすぎたかな”と思えたら面白い」と岡田さんは返していました。



観客はなにを見ているのか

「人が、家の話をするのを見ながら、自分の家を思い出した」と参加者が言ったことから、「パフォーマンスを見る観客はなにを見ているのか」という話に発展しました。岡田さんは「演者が想像することによって、観客にその想像を経験させることができる。しかしその想像は演者が見せたいものと同じでなくても良い。演者が観客の想像力を引き出している。」と話した。また「自分も持っている想像を伝えようとしすぎないほうが、観客が想像できるパフォーマンスになる」とも話されました。

特に重要なのは観客

岡田さんは「想像はウツであって、現実のように取り扱わないこと。」また「想像を大事にすると同時に、観客も大事。なぜならその想像は観客のためにもあるものだから。」と話した。

文・写真：ゆりえる

第4回 川口隆夫「憑依する身体 — 大野一雄の踊りによって」

2023年2月18日（土）

〔講師コメント〕

即興的な要素も含み、老齢というだけでなく特異な身体的・運動的特徴や癖までもその本質として含んだ大野一雄の踊り。そこに足すも引くもなく、それを忠実に模倣しようと努めることは、それをを行う主体側の解釈や特性を消して、可能な限り対象に自分を重ねようとするに他ならない。しかし、重ねよう、寄せようとすればするほど、その重ならない部分、どうしてもはみ出してしまう部分がある、逆に、その主体の存在の消すことのできない有り様を浮かび上がらせるという、「コピー」であるがゆえに「オリジナル」であるという、パラドックス。伝説の舞踏家、故・大野一雄の初期代表作からいくつかのシーンの初演の映像を見て、その踊りを〈完コピ〉することを試みる。



川口隆夫（ダンサー・パフォーマー）

1990年よりコンテンポラリーダンスカンパニーATA DANCEを主宰。96年よりダムタイプに参加。2000年以降はソロを中心に、「パフォーマンスとしか言いようのない」（朝日新聞・石井達朗）作品を数多く発表。08年より「自分について語る」をテーマに『a perfect life』シリーズ。そのVol.06「沖縄から東京へ」で第5回恵比寿映像祭（2013）に参加した。近年は土方巽著『病める舞姫』を元にした『ザ・シック・ダンサー』（2012年～、共演・田辺知美）、『大野一雄について』（2013年～）を発表。後者は世界35都市を巡演。21年にはTOKYO REAL UNDERGROUND フェスティバルにて芸術監督を務め、新作『ミノタウロ・ディスコ』を発表。またアートイベント「INOUTSIDE」を共同企画。これらの活動が評価を受け、令和三年度文化庁芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。

実施レポート

2023年2月18日（土）、川口隆夫さんを講師にお招きし、「未来の踊りのためのプログラム」第4回ワークショップを実施しました。川口さんは、1996年からパフォーマンスグループ「ダムタイプ」に参加、2000年からは並行してソロでダンサー、パフォーマーとしても活動しているアーティストです。

ワークショップの始まり～大野一雄と川口隆夫について

川口さんは参加者の前に座ると飴を配り始めました。「大野一雄が『死海』という作品で飴を配って始めたことを受けてやってみました」と、川口さんは大野一雄との関わりについて話し始めました。

意外にも大野一雄に会ったことはあるが舞台は観たことがないと



いう川口さん。形や記号に重きを置くダムタイプに参加する一方で「身体の内側にあるリアリティーと外側にあるパフォーマンスを舞台にどう落としていくか」という課題が、川口さんの中で大きくなっていったそうです。そうしているうちに大野一雄の名前が浮かび、2013年に『大野一雄について』に取り組むことになりました。「形から・形だけを否定する大野一雄を、形から・形だけで完全にコピーしたら、魂がおりてくのではないか？」という仮説を立て、精神性や教えを排除して形だけの完全コピーに徹して作品を作りあげました。

今回のワークについて

川口さんは『大野一雄について』のリサーチで行ったドローイングを参加者に見せました。大量のドローイングには川口さんの大野一雄への眼差しと時間が濃縮されていました。「今回のワークでは、完全コピーに徹することで、個を消して、感情を消して、癖とか自分を消していく。それを通して作家性、踊る主体について考える「探りの身体」を行いたい。いいなと思うものを採取して、それを身体の中に入れていけばいいな」と今回のワークの目的を語りました。

完全コピーに取り組む

事前課題として参加者が書いてきたドローイングと大野一雄の写真を眺めながら、課題の感想や大野一雄の印象について話し合いました。「独特」「どの瞬間を切り取っても美しい」「大野さんじゃないものになっている」「形から入っているようで内面的」「絶妙」。出てくる言葉からは大野一雄を掴みきれないもどかしさが感じられました。川口さんとともに写真や映像から読み取れる細かい重心や目線の動きを意識しながら動いているうちに緊張が高まった参加者たち。彼らをほぐすために川口さんは全員で『愛の夢』を踊ることを提案しました。川口さんと一緒に一曲を通して踊ってみると、想像以上に息が上がり、あまりの激しさに思わず笑みがこぼれました。



その後、各々の方法で完全コピーに取り組みました。川口さんに質問をしたり、ドローイングを眺めたり、スマホを片手に踊ったり、試行錯誤を繰り返しました。最後に一人ずつコピーした踊りを発表しました。重力と手の繋がりを意識した人、足踏みの音の違いから身体の動きに追った人、中指の動きに発見を得た人など、全く異なったアプローチでの『大野一雄について』が披露されました。

最後に、大野一雄について

川口さんはまとめとして、「大野一雄がなぜ世界で受け入れられたのか？」について自身の考えを話しました。「彼が受け入れられたのは“どんな暗いことをテーマにしても底抜けの明るさ、楽観主義エネルギーがあるところではないか”と言った人がいました。大野一雄のポジティブさを受け取ればいいなと思っています。」独自性を追求しオリジナルの創作を目指す若手アーティスト達が、普遍性を持つ大野一雄の完全コピーに挑んだ事で、却って自分自身を鮮明に際立たせる体験をしたようでした。大野一雄の踊りが川口さんから参加者の未来へと繋がっていくのを感じるワークでした。

文：武田里美